

### <随想>小田切先生のこと

任, 展慧 / イム, ジョネ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

40

(終了ページ / End Page)

41

(発行年 / Year)

1987-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019489>

## 小田切先生のこと

小田切先生が法政大学にいらっしやらなかつたら多分、私は法政大学とは縁がなかつたであろう。私ごとになるが、十条の東京朝鮮高校を一九五五年に卒業した時、私は金日成綜合大学への進学を心に決めていた。しかし、当時、朝鮮民主主義人民共和国への帰国の途は閉ざされていた。同じ希望を持っていた友人たちと、帰国実現のすべを求めて日本赤十字社、外務省、厚生省等に何度も足を運んだ。陳情が日課のような明け暮れであった。卒業二年目の十二月に入ってまもなく、日本赤十字社の計らいによって、スエーデン船による上海経由の個人帰国の途が約された。私は単身帰国の準備をした。ところが、月末の出港間近になって外務省の横槍が入り駄目になった。強い衝撃を受けた。みずからの意志にかわりなく「在日」を強いられたことに憤りを感じずにはいられなかった。

日本にとどまる以上、大学進学に際しては日本文学科にしようとしたのである。そこに自分自身にとっての「在日」の意義を見出そうとしたのである。知人にその話をしたところ「小田切先生のいらっし

イム  
ジヨ  
ネ  
任  
展  
慧

やる法政大学がよい」と、薦められた。私が先生のお名前をはじめて耳にしたのは、この時であったと記憶する。内申書のことでも出身高を訪れた時、宋枝学校長も「小田切さんのおられる法政ならば」と、賛成してくださった。そこで、他大学の受験は念頭におかず、法政の日本文学科だけを受験した。念のために、二部をも受けることにした。当時、外国人は受験の際に外国人登録済証明書を提出することになっていた。区役所で使用目的欄に「法政大学受験のため」と書き、二通申請した。受付にいた中年の婦人が「他の大学は受けなくてもいいんですか」と、心配そうに言ってくれたことを覚えて

いる。

幸い一部に入ることができたが、一年間は木月校舎に通い、先生の講義を聞くことはできなかった。二年生になり市ヶ谷校舎に移ってから、先生のゼミのもぐり聴講生になった。先生にお願いにうかがったところ「まあ、いいでしょう」と、御快諾いただいた。いよいよ三年生になり、先生のゼミの登録の日には、国電山手線の始発

で学校にゆき受付の前に並んだ。当時は先着順で締め切ったからである。私が一番早かった。

同期の片桐登さんは『日本文学誌要』二八号の座談会「昭和三十年代の活動」のなかで、つぎのように語っている。

「その頃はまだゼミの選択の登録は早い者勝でしたから、小田切先生のゼミに入る人は嘘か本当か朝四時頃から受付のところへ行って並んだなどと聞きました。」

これは「嘘」ではなく「本当」のことであった。ただ、私の場合は五時ちょっと前であったが。

小田切ゼミで最も印象的だったことは、主体的な勉強の大切さを教えられたことである。ゼミの最初の日に「教師の言葉を鵜のみにしてはいけない。反対意見があったら述べなさい。根拠に基づいた反論を期待します」と言われた。そして、その方針は試験の採点にも貫かれていた。「舞姫」を論じる出題に、つい先生の作品評価を念頭においた答案を書いてしまった。結果は「可」であった。

私の学生時代に、先生はただの一度も休講されなかったことも、忘れられないことである。大学紛争で教室が使えない時には、駿河台下の喫茶点「ハトヤ」に行った。お風邪の時には、先生のお宅にうかがった。私が博士課程に在籍していた時、先生はご母堂を喪われた。初七日に当る日がゼミと重なり、当然、先生は休講されるものと思い、私は学校に行かなかった。先生にたしかめることも憚られたので、お電話しなかった。ところが、聴講生としてゼミに出席していた修士課程の西岡健治さんから電話があり、小田切先生がい

は、学生二人、聴講生一人であった。私はびっくりして欠席した理由を伝えた。まもなく、先生から直接お電話をいただいた。私は恐縮して、しどろもどろにお悔やみと欠席のお詫びとを申し上げた。きついお叱りを受けるものと覚悟していた。だが、先生は「いや、いいんだ。法要にはこれから出かける。今日は君のやさしい気持ちに感謝している。どうもありがとう。」と、言われた。受話器を置いた時には、冷や汗がでていた。

修士課程を卒えて博士課程に進むまで、私には六年間のブランクがある。第二子を出産したが、近くに零歳児用の保育所はなく、子供を預けるには四歳になるまで待たねばならなかった。なんとか勉強を続けたいと思いながらも、育児と家事に追われて身動きがとれずにいた。辛い時期であった。この頃、先生からお葉書をいただいた。「人生は長いのでからあわてて何かをする必要はありません。ゆったりと考えて下さい。」このお葉書に支えられて博士課程への受験を決意し、再び大学院に戻ることができた。私が研究者の道を歩むことができたのは、ひとえに先生のお陰である。

しかし、怠惰な私は、先生の寛容なお言葉に甘えて、あまりにも「ゆったり」しすぎてしまった。先生の眼には、私ののろのろした歩みは、さぞじれったく歯がゆいものに映っていらっしやるにちがいない。身のすぐむ思ひである。学部・大学院時代とも、師事したいと願った先生に教えていただくことができ、私は幸福な学生であった。